歴　史

Early Pioneers

1

日本人のパイオニア・カイロプラクターたち

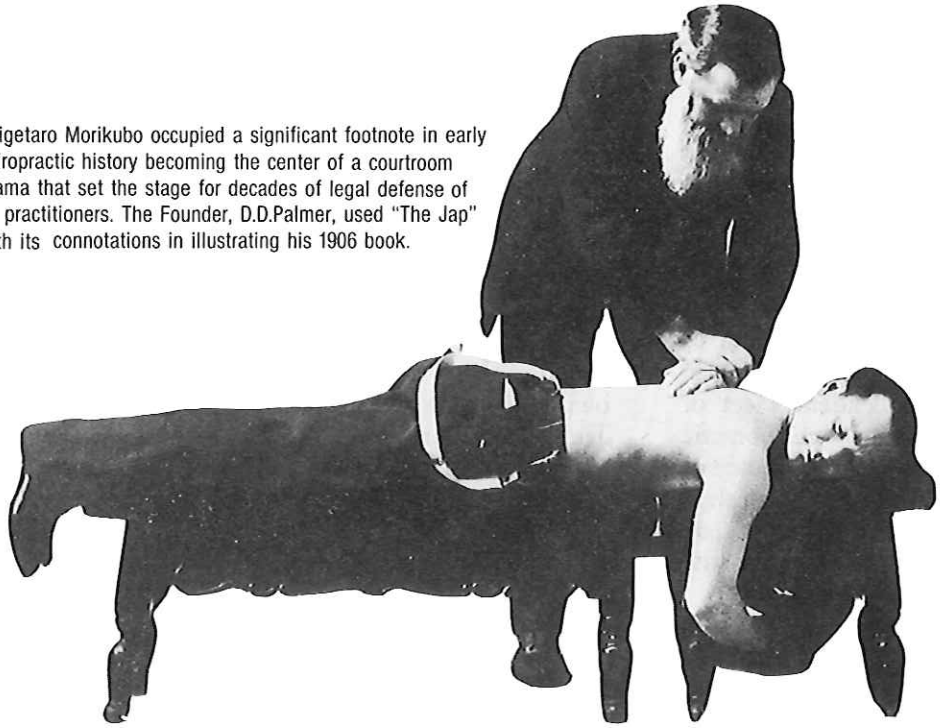
The Roots of Chiropractic in Japan

最初の日本人カイロプラクター森久保繁太郎

Shigetaro Morikubo : The First Japanese Chiropractor

MORIKUBO Shigetaro
(1888?-1933)

Shigetaro Morikubo occupied a significant footnote in early chiropractic history becoming the center of a courtroom drama that set the stage for decades of legal defense of its practitioners. The Founder, D.D.Palmer, used "The Jap" with its connotations in illustrating his 1906 book.



D.D.Palmer adjusting Shigetaro Morikubo 1906. Courtesy of Palmer Health Science Library

創始者DDパーマーから治療を受ける最初の日本人(日系人)、森久保繁太郎(1906年撮影)

日本人で初のカイロプラクター森久保繁太郎氏は1888年頃東京で生れた。青年時代の教育を日本で受け、その後アメリカに移民し西海岸で大学教育を続け、病理学で身を立てようとした時、運命のカイロプラクティック療法と出会う。カイロに興味をもった彼は1906年３月ダベンポートのパーマースクールに入学。翌年卒業した彼はウイスコンシン州のラグロッソで開業する。当時カイロプラクターは全米で５百人程度で、法制化された州はまだなかった。(最初の法制化は1913年カンザス州)

森久保氏は当時高まりつつあった東洋人排斥運動と、新しいカイロ療法への偏見に合い1907年７月22日、無免許医療行為で告訴される。二代目ＢＪパーマーとパーマースクールは1903年頃よりカイロプラクティックの法的な問題をかかえていた。創始者ＤＤパーマーが1903年に学校を息子に譲ったのも学校の財産を守るためだったと言われている。ＢＪは森久保氏逮捕を聞いてすぐ救援にかけつけ、弁護士にトム・モリスを依頼する。モリスは創始期にあったカイロに関するあらゆる知恵を動員し、カイロプラクティックがオステオパシーとも医学とも異なることを主張、その結果無罪を勝ち取る。

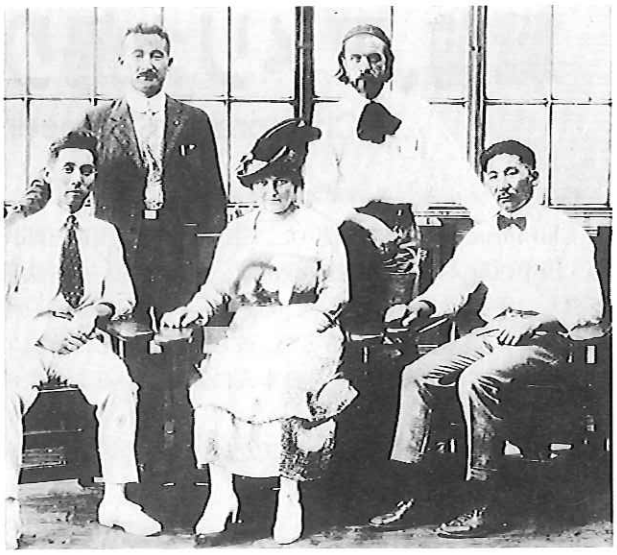
モリス弁護士はその後ウイスコンシン州副知事まで栄達する。知事選挙で敗北した彼はＢＪが1906年に創設したユニバーサル・カイロプラクティック協会の法律顧問を長く勤めた。モリス弁護士の勝訴はカイロプラクティックの職業的生命を救う事件であった。

勝訴したものの、森久保氏は安住の地を求めミネソタ州ミネアポリスに移転する。彼は豊かな生活と平和な環境に満足していた。カイロプラクターとしての彼の日課は治療の他に、時間を指定して患者さんを集め、１グループごとにカイロと健康について講話するのが日課だった。彼の説得力と真面目な態度は聞き手を引き付けて、著名なドクターとして知れ渡ることになる。彼が没したのは1933年、50代半ばであった。初の日本人カイロプラクター、森久保氏はアメリカのカイロ史に残る人生を送ったことになる。

日本への紹介者 川口三郎 Saburo Kawaguchi : The First man to introduce Chiropractic to Japan

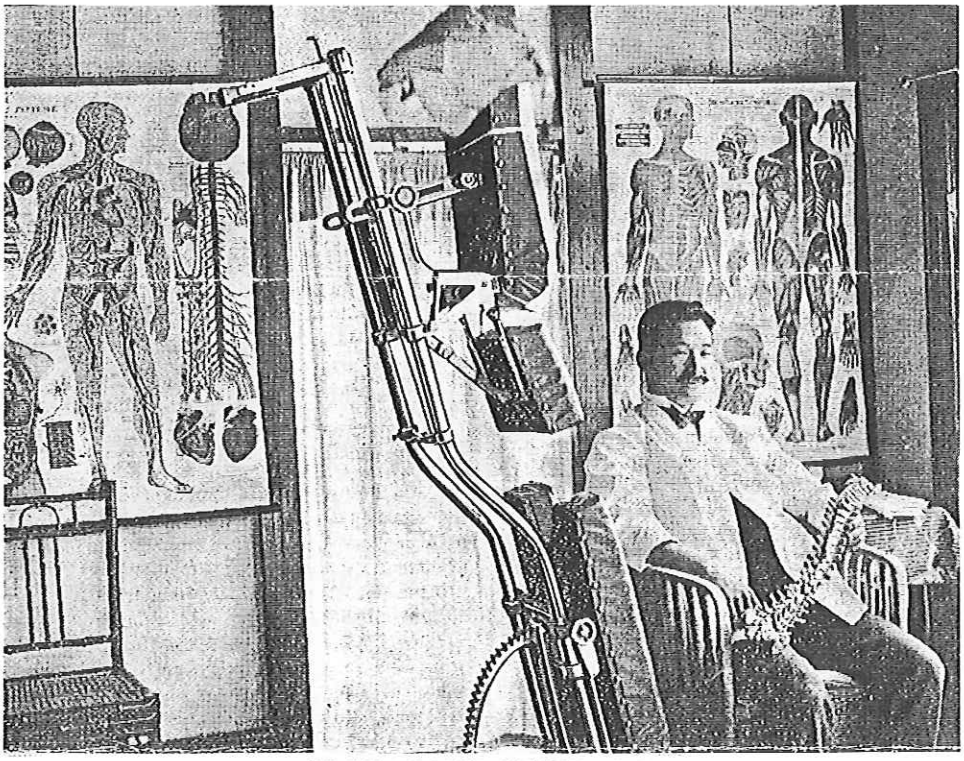
KAWAGUCHI Saburo
1916年パーマー卒

帰国第１号の川口三郎氏を始め、戦前アメリカでカイロを勉強した人は、さまざまな目的で渡米した後、カイロと出会い転身した人たちであった。



First Row From Left : Tadashi Kanazawa, ▶ Marbel Palmer. Isekichi Serino (Circa 1914)
Second Row From Left : Saburo Kawaguchi, B.J.Palmer

B. J. パーマーと日本人留学生たち
前列左から、金沢督、マーベル（BJの妻）、芹野伊勢吉
後列左から、川口三郎、BJパーマー



IN THE LAND OF NIPPON.

The backbone is the same the world over. This is the reason why Chiropractic belongs to the world. The cut illustrates Dr. Paul Saburo Kawguchi, D. C., and a part of his office equipment at Yokohoma. There are several Japanese Chiropractors in this country, as well as in their own country. The land of the Mikado soon will see the wonderful health science practiced in many parts of the flowery domain. The adjusting table shown is an early pattern of the Stiles angle vertical lift hylo.

DAVENPORT IOWA The CHIROPRACTIC CITY

川口三郎氏は1885年（明治18年）東京に生れた。1905年日露戦争直後、米国ルーズベルト大統領の招きで柔道の教師として山下七段一行の一員として渡米。アメリカで初めてカイロプラクティックに接した彼は、その効果にすっかり魅了され、時をおかずパーマースクールに入学。1916年に卒業して帰国。横浜で開業したものの官憲は薬もメスも使わず治療するというのがよく分からない。川口氏は神奈川県知事に直接談判し、それ以来同県では届け出ですればカイロが営業が出来るようになった。左の写真はＢＪパーマーが出版した「ザ・カイロプラクター」に掲載されたもの。横浜で開業後、川口氏は上海に渡って治療を続け、世界各地を旅行するようになった。しかし上海事変の勃発で帰国。今度はホノルルへと旅立ち、その後の消息は途絶えている。

ＢＪパーマー発行の「ザ・カイロプラクター」に掲載
1916年10月号
The Chiropractor
October 1916
(Courtesy of Palmer Health Science Library)

戦前、アメリカ帰りのカイロプラクターたち

Chiropractic Pioneers : Pre-World War II in Japan

戦前、アメリカで教育を受け日本に帰国したＤＣ（Doctor of Chiropractic）は14名程いた。帰国第１号の川口三郎氏を初め、田中酉造、芹野伊勢吉、金沢督、大澤昌壽、小平粂重、千葉忠八、幡谷高山　横矢重孝、鈴木泰三、櫻庭豊、鴫原伊直、桜井真一・静子夫妻らであった。彼らのほとんどは治療に専念し、カイロプラクティックを日本人に教え広めることに消極的であった。

ただ大澤昌壽、小平粂重の２氏だけはカイロの治療技術者の養成に意欲的だった。大澤昌壽氏は1923年（大正12年）頃日本で初のカイロ団体、日本カイロプラクティック協会を設立、自ら初代会長に就任、小平粂重氏が副会長に就任した。大澤、小平ＤＣは1924年、東京有楽町の実業の日本社ビルで開業、同年３月の雑誌「婦人世界」誌上で初めてカイロプラクティックを紹介し注目を浴びたが、情報も講習も少ない昭和初期の時代のこと、「手技」関係の主流は整体と指圧が９割で、カイロプラクティックを行なう人はまだわずかだった。

田中酉造　1914年パーマー卒
Torizo Tanaka, Graduate of Palmer School 1914 circa 1926

芹野伊勢吉　1919年パーマー卒
Isekichi Serino, Graduate of Palmer School 1919 circa 1926

金沢　督　1920年パーマー卒
Tadashi Kanazawa, Graduate of Palmer School 1920 circa 1926

大志を抱いた若きパイオニア

日本のカイロプラクティックに関する戦前の資料は極めて少ない。著述された記録がほとんどないので、本人の没後貴重な足跡は永久に消えてしまった。幸い、竹谷内米雄氏が1967年（昭和42年）、自ら発行する新聞記事取材のため、当時存命していた晩年の芹野伊勢吉、金沢督氏らと会い、数少ない貴重な戦前の歴史の一端を記録に残すことが出来た。本稿はその要約である。

日本にカイロプラクティックを紹介したのは卒業後すぐに帰国した川口三郎氏（1916年パーマー卒）だが、川口氏より２年前（1914年）にパーマーを卒業した人に田中酉造氏がいた。田中ＤＣは卒業後、オハイオ州クリーブランドで開業。1919年にパーマーを卒業した芹野伊勢吉青年と友情を育み、共にアメリカでのカイロ法制化運動と市民の健康に貢献する。その後、帰国した田中酉造氏は、村長として在郷の面倒を見て1960年頃没した。田中氏と芹野氏との友情は帰国後45年間続く。一方、芹野伊勢吉氏は卒業後インディアナ州エバンスビルに移る。そして1925年にカリフォルニアでカイロの法案が通った際、初の日本人合格者となった。1930年(昭和５年)に芹野氏は帰国、福岡市で開業する。多くの国民同様、1945年の戦禍で全てを失いながら腕と信用で再起、1968年まで82歳の長寿を全うする。

金沢督氏は佐渡に生れ、1906年、17歳の時大志を抱いてワシントン州シアトルに渡る。たまたま出会ったカイロプラクティックの素晴らしさに魅了され、ダベンポートに向かう。パーマーでは１年上級に芹野伊勢吉氏がおり、２人の長い親交が始まった。1921年（大正10年）、31歳の時帰国。帰国したその年に、ＢＪパーマー夫妻と息子のデビッドが世界旅行の途次日本に立寄り、案内役を努める。1939年（昭和14年）老齢の父の面倒を見るため、生れ故郷の佐渡に戻り晩年を過ごした。

当時カイロプラクティックのメッカ、アイオワ州のパーマースクールは1906年、創始者の父ＤＤから経営権を譲り受けたＢＪパーマーの全盛期にあった。1910年頃、パーマーの学生数は250名、教育年限は１年であった。1920年頃の教育年限は年６カ月授業で３年コース。ストレートで授業を受ければ18カ月で卒業できる時代だった。同州にカイロの法制化ができたのは1921年であった。

大澤昌壽　1921年ナショナル卒
Shoju Osawa, Graduate of National College 1921

小平粂重　1921年ラトレッジ卒
Kumeshige Kodaira, Graduate of Ratlege College 1921

波瀾万丈の桜井夫妻

桜井真市氏は1905年（明治38年）、大志を抱いて可能性を秘めた新興国アメリカに渡る。当時の多くの青年の例外にもれず徒手空拳の渡航であった。最初サンフランシスコに到着、あらゆるアルバイトで生活を立て、語学にも慣れ、信用も得て、蓄財も出来た頃、1912年空気がよく肥沃なスクラントン郊外の農場で耕作に励むことになった。ゆとりが出来た頃日本人の静子さんと出会い結ばれる。平和な家庭の２年が過ぎた1922年の夏、過労に過ぎた桜井氏の体に病が襲う。腰から足にかけての激痛であった。医療に効果なく悩んでいたとき勧められて受けたのがカイロプラクティックであった。わずか10回の治療で回復し、その信じられない偉効に感激した彼は、10年間育てた農場を整理、一念発起でカイロプラクティック勉強のため家族５人とパーマースクールへ旅立つ。静子夫人は彼の良き理解者で心強い協力者であった。1924年３月夫妻はパーマースクールに入学し、２人は25年10月にそろって卒業。在米20年の思い出を胸に、帰国したのだった。

帰国に当たり、在日外国人の多く住む神戸を開業の地に選んだ。治療の評判も知れ渡った頃、1941年に太平洋戦争が始まり、外国人は去り、15年かけ営々と築いた治療所も戦災で一夜にして消失。

しかし、桜井先生ご夫妻は、カイロのアジャストの素晴らしさを自信に、戦後見事に復活された。

桜井真市、静子夫妻
Shinichi and Shizuko Sakurai D.C.
Both graduated from Palmer School in 1925(circa 1968)

北海道でカイロを普及

櫻庭　豊氏

櫻庭豊氏は北海道室蘭市に1891年（明治24年）生れる。1913年（大正２年）に至るや青年の大志を抱いて渡米。サンフランシスコで語学を学んだ後、ナショナル・カイロプラクティック・カレッジに入学。艱難辛苦を経て1919年に卒業。25年にはオレゴン州ポートランドに移って盛業を極める。その後望郷の念絶ち難く、故郷に錦を飾るため1927年（昭和２年）帰国。しばらくは東京で開業、日本でのカイロ・カレッジ設立に夢をかける。晩年は生地の室蘭にもどって開業し、1971年（昭和46年）２月、80歳で死去。

101歳の天寿を全う

横矢重孝氏

横矢重孝氏は1876年（明治９年）高知県香美郡に生れた。1914年（大正３年）、読売新聞の記者として渡米。その時に患った神経痛をカイロプラクティックで治してもらったのがきっかけで、ニューヨーク・スクール・オブ・カイロプラクティックに学ぶ。40歳を迎えての転身であった。1926年（大正15年）に帰国、東京の丸の内で開業し、多くの名士を治療し評判を得る。子弟がなかったため、晩年は青山高樹町で夫人と静かに暮らしていた。1976年（昭和51年）９月に101歳の天寿を全うし永眠。

横矢重孝
Shigetaka Yokoya D.C.
Graduated from New York Chiropractic School

日本の礎石を作る

大澤昌壽氏と小平粂重氏が、カイロプラクティックの世界に入るきっかけとなった動機は不明である。分かっているのは共に1921年、ナショナルスクール（現在のナショナルカレッジ）とラトレッジ・カイロプラクティックカレッジを卒業したことだ。パーマースクールの教員でＢＪパーマーのもとにいたジョン・ハワードはＢＪと教育方針で対立し1906年にナショナルスクールを創立。1908年にシカゴへ移転。1914年に同校教員の一人、ウイリアム・シュルツ（医師）に経営権を譲る。大澤氏が学んだのはシュルツ学長のもとであった。小平氏がロサンゼルスで学んだラトレッジカレッジは、Dr.Tullius F.Ratledgeにより1908年開校され、1955年にクリーブランド・カイロカレッジに併合されるまで続いた。

大澤、小平両氏の出会いは不明だが、卒業後すぐに帰国した両氏は東京有楽町のビルでパートナーを組んで開業。患者の治療だけでなく、共に後進の指導にも熱心で50～60人の弟子がいた。なかでも松本茂氏は大澤、小平両氏の直弟子として1928年（昭和３年）から３年間、２つの異なる技法を学び、1929年以来開業のかたわら半世紀以上全国のカイロプラクティック技術普及の先頭に立つ。

1918年（大正７年）、川口DCの努力で神奈川県で全国初の「カイロプラクティック取り締まり規則」が制定され、試験免許による開業が行われた。アメリカでの熾烈な法制化をめぐる弾圧闘争を経験していた当時のDCたちは、身の安全確保のため全員この神奈川県発行の免許資格を取得していた。

1930年（昭和５年）から終戦までの間、カイロプラクティックは警視庁令や地方県令による届出制が続く。興味深いことに、戦前の法制度の方が地方分権で自由度が高く、戦後は中央集権で規制が強い。

戦前、日本DCカイロプラクティック協会という留学帰朝者の懇親会があったが、DCの高齢化と減少で自然消滅してしまった。なぜ戦前のDCが一部例外を除いて後継者育成に不熱心だったのか、いまでは永遠のナゾである。

カイロがマスコミ(雑誌・テレビ)に初登場

Chiropractic First Introduced in the News Media

日本で初のカイロ雑誌紹介記事

Chiropractic First Journal appearance 1924

1924年（大正13年）3月号
大澤昌壽氏が「婦人世界」
誌上でカイロプラクテッ
ックを初めて紹介

米國の醫界に大革命を起した最新科學療法
カイロプラクチックは如何なる療法か

ドクター・オブ・カイロプラクチック　大澤昌壽

▼最新の科學的療法

カイロプラクチックとはグリーキ語から來たもので、グリーキ語のカイロは手を意味し、プラクチコは技術を意味します。即ち手を用ひて、骨格の關係の矯正を為す技術

カイロプラクチックとは何なる療法か

▼病ひは骨格の異狀から

生理學を學ばれたお方は、人體の骨格が如何なる重要な役目をなすかを知つてゐるのであります。

▼最新の科學的療法

カイロプラクチックとは何なる療法か

カイロプラクティック
日本で最初のTV放映

Chiropractic First TV appearnce 1966

東京放送テレビ、芥川也寸志土曜パートナー
1966年12月10日
全国放送、約20分、竹谷内米雄氏出演

初の雑誌掲載

「カイロプラクティック」の名が日本のマスコミ雑誌に登場したのは、1924年(大正13年)、「婦人世界３月号」誌上が最初であった。筆者は1921年(大正10年)アメリカでカイロプラクティックを学んで帰国したばかりの大沢昌壽氏。これが好評で同年３回シリーズで「実業之日本社」が取り上げる。

健康情報が乏しかった大正時代、大衆誌によってカイロプラクティックの名が広められた意義は大きかった。

初のテレビ放映

1964年（昭和39年）東京オリンピックを機会にテレビブームが起きる。

カイロプラクティックがテレビで初放映されたのは1966年（昭和41年）12月10日であった。番組はＴＢＳの第６チャンネル、芥川也寸志の「土曜パートナー」。

鈴木治彦アナウンサーが解剖図を背景に、ＴＢＳのスタジオに向かって「ただいま、東京青山のカイロプラクティック研究所に来ています。ここは諸病の根源といわれる背骨の歪みを調整する所なので、これからどんなことをやるか見聞したいと思います」。

竹谷内米雄氏が背骨の模型でカイロプラクティックの原理をアナウンサーに説明する。次に治療ベットにモデルが横になり実際の治療を体験する。竹谷内米雄氏が背骨を触診しながら、的確に症状を指摘、アナウンサーを驚かした。

朝の20分間、庶民が朝食の膳に向かう最良の時間帯に、生放送で全国に放映された影響は大きく、カイロプラクティックの真価を大いに高めた。

Non Japanese Who Helped to Promote Chiropractic in Japan
カイロプラクティックの普及を助けた在日外国人たち

戦後カイロプラクティックの普及に協力した在日外国人を忘れては恩知らずになろう。そんな思いを知らされたのは、最近の英字新聞で紹介された故ドクター・ベーカーである。ベーカーさんは女性のカイロプラクターで1950年から70年代にかけて多くの日本人や在日外国人を治療し有名な存在であった。1950年頃来日したカイロプラクター、ロジャー・アルトは日本人にカイロを教え、その生徒は1953年に東京カイロ学院を創設。父親がカイロプラクターだった宣教師ブレイ博士は、1960年から80年代にかけ関西学院大学教授のかたわら大勢の人を無料治療、カイロプラクターに紹介した。オーストラリアのカイロプラクター・デニス・マー氏も1970年から80年代にかけて日本で開業、多くの人々を治療で救った。いずれも忘れ得ぬ人たちだ。

It would unfair if we did not mention those non-Japanese who helped to promote chiropractic in Japan. Chiropractic was little known in the 50's, 60's and 70's. It was during this period that people like Drs. Roger Alt, Myrtle Baker, Reverand Bray and Dennis Maher not only helped many patients but also promoted awareness of chiropractic among Japanese people.

The article below talks about Dr. Myrtle Baker who did so much for her patients and the profession. Japanese people will be forever grateful to those who played such an important role during the development of modern chiropractic in Japan.

Asahi Evening News
Tuesday, May 24, 1994

SURVIVAL/ *Ken Joseph Jr.*

Chiropractors more than back crackers

Dear old Dr. Baker, as we kids called her, or the Magic Lady, came to Western Japan for a reason that few remember now. She remained for years to practice chiropractic medicine, treating anything from wrestling injuries to common colds, with what seemed like magic from her bottomless bag of solutions.

Myrtle Baker was a chiropractor, but much more than that. If she couldn't fix somebody by cracking his back or sitting on him, she made him aware of the connection between health and diet by having him recite one of a dozen pertinent health food directives, such as, "I will not eat sugar" or "I will not eat white bread."

Dr. Baker was always able to remedy physical pain, but more than that, she assuaged the emotional ups and downs we experienced growing up in Tokyo by doubling as a surrogate grandpa, grandma, aunt or uncle.

She was a person we could talk to, confide in and reach out to when we could not go to our parents.

Today's parents and children suffer from an ever-widening communication gap. With so little interaction between them, youngsters requiring more help or wisdom than a self-help book need voices of experience to confide in all the more.

While Dr. Baker is gone now, there are many other resident-sages around Japan who have much to offer young people growing up overseas. The language barrier, cultural difference and living far from home contribute to the need for this type of informal counseling.

Voices of experience can become valuable mentors to people growing up in a society sadly lacking in relevant role models.

The practice of chiropractics has grown considerably since Dr. Baker's death some years ago. Chiropractics helps not only a bad back, but provides solutions for a number of chronic illnesses and conditions that the Western, orthodox doctor does not seem to be able to cure.

Chiropractic therapy is not a substitute for regular medical treatment, but as a supplement and preventive treatment it can be very helpful.

There are many chiropractic practitioners in Japan today. Dr. Baker's main student, Dr. Masayoshi Morita, studied directly with Dr. Baker, helped him get into chiropractic school and earn his degree. Dr. Morita is now in Tokyo and can be reached at 03-3983-6269.

The Chiropractic Center has offices in Nagoya at 052-895-4131 and Yokohama at 044-933-9547. In Tokyo try the Tokyo Chiropractic Center at 03-3478-2713.

While it is impossible to list all the telephone numbers of chiropractors in the country, information is available by calling any one of the above telephone numbers.

I would very much appreciate hearing from you about your non-conventional treatments in any area, not simply chiropractics. I would like to stress the value of alternative therapies in treating chronic illness and preventing sickness.

I would also like to seek suggestions from long-time residents of Japan who feel they might have some wisdom and guidance to offer a youngster by acting as a surrogate grandparent, aunt or uncle.

Parents interested in exposing their child to the wisdom of an older person are also encouraged to contact me at the Survival section of the Asahi Evening News.

It you have any questions or topics you would like to have discussed in this column, please write to Survivil, Asahi Evening News, 5-3-2 Tsukiji, Chuo-ku, Tokyo, 104-11. The writer is director of Japan Helpline.